

## 最優秀賞（中学生の部）

### 父と私のコミュニケーション

喜多方市立塩川中学校 一年 五十嵐あかり

“あかりさん、おはよう。元気かな。” 今朝も六時三十分にラインが届いた。父からだ。毎朝同じ時間に必ず届く。内容はほぼ毎日同じだ。あいさつ、安否確認、天気の話、ニュースを見て私に気をつけてほしい事など。そのラインへの私の返信もほぼ毎日同じだ。 “元気です” か “はい”

父は、三年前から単身赴任で東京にいる。帰省するのは、一ヶ月に一回だ。なので、私を心配して毎朝ラインを送ってくれる。父と離れて暮らし始めた頃は、ラインが届くのがうれしくて、ていねいな返信をしていたけれど、一年ほど前から、いつも同じ内容に何と返信して良いか分からないし、面どうに感じるようになってきていた。 “はい” と返信をするだけなら、返信しなくてもいいのではないかとも思っていた。

ある日、学校から帰宅すると母に「お父さんからのライン返信した?。」と聞かれた。私ははっとしてけい帯を確認した。今朝の父からのラインは、読んただけで返信をし忘れていた。その事を母に伝えると、「なんで?一言くらい返信する時間あったよね。」と強い口調で言われた。私はちよつとむつとして「毎日毎日同じ内容のラインで、なんて返信していいか分からないもん。考えてたら時間になったから学校に向かった。」と答えた。すると今度はもつと強い口調で、「お父さんは、あかりのために一生けん命働いているんだよ。あかりと離れて暮らしてさびしいの。毎朝のラインは、思春期のあなたとのゆいいつのコミュニケーションなの。無視するなんてありえない。」としかられた。後から聞いた話だと、返信がなかった事を心配して父が母に電話をしてきたらしい。友達となんかあったのか、母とけんかしたのかなどと心配していたそうだ。特に何もなく元気に登校したことを母が伝えると、「それならいいんだ。よかった。」と言っていたそうだ。それを聞いて私は、めんどろに思つて返信をしなかったり、母におこられた時に言い訳をしたりした自分をなさげなく思つた。父に申し訳なくて謝りたい気持ちでいっぱいだった。でも父に素直になれなくて “おそろくなりました。元気です。” とだけ返信した。父からは “元気なら良かったです。学校は楽しかったかな?” と返信がきた。返信をしなかったことを責めたり、おこったりしなかった。父が本当に心配してくれているのだと実感した。なみだが出そうになった。それから私は、毎日父からのラインにきちんと返信をしている。照れくさくていろんな事は言葉にする事ができないけれど、 “元気だよ” というメッセージはきつと父に伝わっているはず。口下手で面と向かつてあまり会話をしない父が、大切にしてくれているコミュニケーションを、私も大事にしていきたい。 “今日もわたしは元気です” と伝えるために。